

# 新出漢字に接する際の生徒の意識に関する一考察

寺 門 正 人

中学三年生が習得する漢字については、新しい指導要領によって

ア、学年別漢字配当表に示す漢字（九九六）に読み慣れ、さらに五百五十文字から六百五十文字ぐらいの当用漢字に読み慣れ、さらにその他の当用漢字も読むこと。

イ、学年別漢字配当表の漢字を主として、千字程度の当用漢字について使い慣れること。なお、それ以外に上記アで学習した当用漢字についても、必要な場合、適切に用いるように努めること。

と定められた。おおむね千字程度を使い慣れて、千八百五十文字が読めるようになることが期待されているわけである。

ところが、昭和四十六年刊の国立国語研究所「中学生の漢字習得に関する研究」によると、中学三年卒業時の漢字の完全習得数（被調査者全員が習得した字数）は、下記に示す通りであって、必ずしもこの期待が容易に達成されるものではないことを示しているということが出来る。

教育漢字(881字)			当用漢字以外の漢字(969)		
書完了	書き完了	読み完了	書完了	書き完了	読み完了
84字	721字	590字	451字	131字	84字
8.7%	81.8%	67.0%	46.5%	13.5%	8.7%

どのように反応しているかという一つの事例を示し、諸賢の参考に供したいと思う。

## 一 資料収集の方法と意義

中学三年生で初出の漢字（語句）の読みについて、学習する前にテスト形式で読ませてみる。その結果、誤読となった漢字について、なぜそのような読み方をしたの

そうした面から考えると、漢字の学習あるいは指導に関する

研究は、今後一層盛んになされなければならないし、その結果として、より効果的な学習法、

指導法が開拓されることが待たれているといえるであろう。そうした研究の一資料として、本

稿では、中学生が新しい漢字に接したとき、これまでの漢字に

関する知識をどのように生かし、

かを調査するという方法をとった。調査対象は、中学三年生一七九名で、漢字は「凝集」「剛毅」「碧玉」をとりあげた。(「毅・碧」はともに当用漢字に含まれていないが、新しい文字に対する反応を調査するという意味で対象とした。従って、ここで習得させることは必ずしも目標としていない。)

これらの調査から、中学生が、新出漢字に接した時に、何を手がかりに読もうとしているか、既習の文字とどのように関連づけようとしているか、文字構造に関してどのような考えを持っているかといった点が探り出せるであろうし、そこから、今日までの漢字指導の欠点や不足も導き出せるであろう。その指導上の欠点や不足については、筆者自身の反省として、今後の指導法の研究に生かしていきたいと思うが、この調査そのものが、学習者である生徒にとっても、「自己の誤読の原因を知る」という意味で、漢字に対する意識の変革となるであろうことも付記しておきたいと思う。

## 二、「凝集」の読みの実態と問題点

新出語「凝集」に関する読みの実態は、表1の通りである。なお、この調査を通して判明したことであるが、この文字は、国語科で学習する前に、理科の学習で「凝

固」という形で提示されている。初出であるのに⑥のように六七％が正答であるのはこのためであり、④のような誤答がでるのも、このためであると考えられる。

最も問題となるのは全体の二五％、誤答のうちの六七％が、凝と疑の混同によって生じていることであろう。実際の指導にあっても、形声文字の視点から「義・議・儀」「溝・講・構・購」などを一つのグループとして指導する方法は有効であり、よく行われるわけであるから、この誤読が生じるのは当然であるともいえる。これらの結果から、

A 形声文字の視点から文字をグループに分ける指導は今後も重視するとともに、その例外となる文字については、特にとり立てて指導をする必要がある。

(京と涼・魚と漁・処と抛・疑と凝と擬など)

B 国語科において学習する漢字と他教科において提示される漢字との関係を、国語科の立場で把握し、整理しておく必要がある。

といった問題をとらえることができるであろう。

## 三、「剛毅」の読みの実態と問題点

剛は当用漢字にあり、「剛健・金剛力」などの例で読みなれているので、この文字は完全に読めているが、毅

「凝集」の誤読例と誤読の理由

〈表1〉 調査人員 179名

		人数(割合)		誤読した理由のおもなもの
①	ぎしゅう	45	25.1%	・凝と疑をまちがえてしまった。 ・凝は疑に「にすい」がついたものだから同じに読むと思った。
②	ぎしゅ	1	0.6%	・凝と疑の読みは同じと思った。(集を「しゅ」と読んだことについては本人の記録がない。)
③	ぎょしゅう	4	2.2%	・ひらがなの書き方を誤った。 ・「ぎょう」という発音を「ぎょ」と書くのかと思った。
④	こしゅう	7	3.9%	・「凝る」で「こる」と読むから。 ・「ぎょうしゅう」と読むと思ったが「ぎょうこ」という語を思い浮かべたら「こ」と読んでしまった。
⑤	無答	2	1.1%	
⑥	正答	120	67.0%	

は、六六%が読めていない。これは、当用漢字ではないから、必ずしも読めることを要求していない文字であるが、その誤読の理由については、注目する必要がある。△表2▽を参照されたい。

まず④⑤の誤読が、同じ部首(るまた)を有することによって生じる類推の誤りであり、それが、想起する文字「穀・殺・役・設」によって、それぞれ異なることに注意する必要がある。この類では「投・段・殿・殿」が当用漢字に含まれているが、これらも、形声文字のグループ「監・艦・鑑」などをまとめて指導する際にそれとの対比において指導することで、一層明確にその読みの違いを意識づけることができるであろう。ひとつの視点からの類推の方法を指導した場合には、その例外も明示しないと混乱を招くという意味では、先述の問題点Aと同様である。

さらに、⑥⑧から考えなければならぬのは、この誤読の原因が、「穀」という文字が人名用漢字別表にあり、日常生活の中でよく使われている点にあることである。特に、この調査対象の生徒の中に「植穀Ⅱよしたけ」という名前の生徒がいて、そこから「穀↓たけ↓竹↓ちく」という⑧のような誤読が生じている。当用漢字に含まれていない漢字でも、生徒の周辺に頻繁に提示さ

「剛毅」の誤読例と誤読の理由

《表2》 調査人員179名

		人数 (割合)		誤読した理由のおもなもの
①	ごうこく	25	14%	・毅を毅とまちがえた。
②	ごうから	2	1.1	・毅が毅に似ていたので「から」と読んだ。
③	ごうさつ	8	4.5%	・毅を毅とまちがえた。 ・毅と毅のつくりが同じだから。
④	ごうえき	2	1.1%	・役と毅が同じつくりで、使役の「えき」だから
⑤	ごうせつ	1	0.5	・毅と設が同じ読みだと考えたから
⑥	ごうけん	17	9.5%	・剛も毅も「強い」意味に関連し、「質実剛けん」という語を思い出した。 ・毅を「たけし」と読むので、音では「けん」だろうと思った。
⑦	ごうたけ	7	3.9	・毅を「たけし」と読むから
⑧	ごうちく	2	1.1%	・毅を「たけし」「たけ」と読むので、竹を思い出して音読みにした。
⑨	ごうかい	2	1.1	・豪快という語が頭に浮かんだので。
⑩	ごうもう	4	2.2%	・なんとなく強そうなので「猛」を考えた。 ・第一印象で「もう」だと思った。
⑪	ごうじょう	3	1.7%	・剛という字があつたので、なんとなく強い意味だと思った。
⑫	ごうまん	2	1.1	・なんとなくそう思った。
⑬	ごうこつ	7	3.9	・なんとなくそう思った。
⑭	ごうこう	4	2.2	・なんとなくそう思った。
⑮	ごうたく	3	1.7	・なんとなくそう思った。
⑯	ごうたつ	3	1.7	・なんとなくそう思った。
⑰	無 答	16	8.9	
⑱	正 答	61	34.1	
①～⑰以外の誤読例(各1名)				
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ごうい    ・こんごう    ・ごうとく    ・ごうぼう    ・ごうけい</li> <li>・ごうた    ・ごうたん    ・ごうぼく    ・ごういん    ・ごうけつ</li> </ul>				

れる文字については、正確な指導を施しておくことが必要ではないだろうか。

さらに、⑨、⑩あるいは⑫、⑬、⑭を含めて考えられるのは、自分の知っている語句と漢字とが照応していないことである。これは⑮についても言える。「剛健・豪快・剛猛？強情・傲慢」などの語が、漢字の意味と形を伴って習得されていけば、多くは生じなかった誤読であろう。これからは、日本における漢字が「文字」であるとともに「語」でもあることの認識の不足を感じるとともに、語彙の不足が痛切に感じられるのである。これらの結果から

C Aと同様に、一つの類推の方法を指導するとともに、その例外の系列をも、指導者はとらえておくことが必要である。

(舌・話・括・活など)

D 生徒の日常生活に使われている文字については、当用漢字以外のものでも、正確を期して指導しておく必要があるのではないか。(特に人名漢字の中で、

山・也・哉・智・杉・桂など)

E 漢字を生活の中で使用することに慣れさせ、習得語彙をできるだけ漢字化できるように努めさせることが必要である。

といった問題をとらえることができるが、Eについては、いわゆる言語事項の語彙を豊かにすることの指導と漢字指導の相乗作用が期待されるであろう。

#### 四、「碧玉」の読みの実態と問題点

この「碧」は当用漢字に含まれていない。しかし、三年生のこの調査の段階では、すでに、「紺碧の空」という形で前単元に学習されている。そのことを考慮に入れて、△表3▽をみると、①、②の誤読の理由がよくわかる。とともに、一回の学習において習得することがいかに不完全であるかということもよくわかる。(この文字の場合、使えるようになることを期待した指導はなされていないが)とりわけ「紺碧」という語を学習し、「こんべき」と読むことを習得しているながら、「こん」と「べき」が文字に結びついていない①の例が、約一八％あることは、つまり「紺碧」の意味の理解が成立していないことを示している。

ところが、④、⑤の例をみると、ここでは逆に字義が優先していて、読みが退行してしまっていることをみることが出来る。指導者の立場からは、字義と語義(熟語の意味)の確かな指導が不十分であったことを反省させられる。

「碧玉」の誤読例と誤読の理由

〈表3〉 調査人員179名

		人数 (割合)		誤読した理由のおもなもの
①	こんぎよく	32	17.9%	・故郷で「紺碧の空」という語を習ったので、その「こん」だと思った。
②	べきぎよく	3	1.6%	・紺碧の「べき」と同じだと思った。 ・「へきぎよく」では、何か不自然で読みにくかったから。
③	へきだま	1	0.5%	・「だま」でもおかしくなく読めたから。
④	りよぎよく	2	1.1%	・碧は「みどり」と読むので、緑の読みと同じだと思った。
⑤	みどりだま	1	0.5%	・「江は碧にして」とあって、「みどり」としか読めないと思った。
⑥	せいぎよく	2	1.1%	・碧のイメージが青い感じだったから。
⑦	おうぎよく	4	2.2%	・左上に王という字があるから。
⑧	せきぎよく	2	1.1%	・下に右があつたからその読みをとつた。
⑨	はくぎよく	3	1.6%	・白という字があるから。
⑩	しらたま	1	0.5%	・白い玉という意味だと思ったから。
⑪	がんぎよく	3	1.6%	・碧を「がんべき」の「がん」と思った。
⑫	ほうぎよく	7	3.9%	・玉をみて「宝」という字を考えた。 ・宝玉という語が頭に浮かんだ。
⑬	こうぎよく	11	6.1%	・碧に王と白があり、組み合わせると皇になるから。 ・玉は価値があるので、皇に近いと考えたし、石から鉞が考えられたので。
⑭	へいぎよく	3	1.6%	・碧を壁とまちがえ、壁を「へい」とまちがえて覚えていた。
⑮	無 答	8	4.5%	
⑯	正 答	85	47.5%	
①～⑮以外の誤読の例(各1名)				
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ろうぎよく    ・はんぎよく    ・まがたま    ・かしわだま</li> <li>・ぎよくだま    ・しょうぎよく    ・しょくぎよく    ・けいぎよく</li> <li>・せんぎよく    ・へんぎよく    ・りよくほう</li> </ul>				

それに対して、⑦、⑩の例は、先行経験の読みが忘れ去られたとみられるので、これは、新出文字に対する反応と同様のものである。それらのうち⑦は「王」を、⑧は「石」を、⑨は「白」を、というように、形声文字の発想法によって、部分を読みの手がかりとしている。これまでの「凝・毅」についても同様のことが言えるわけで、新出文字の読みにおいて、基本的に生徒たちが形声文字の読みの手法を用いることに慣れており、この面の指導が行き届いていることをうかがうことができる。漢字の九〇％が形声文字であるという観点に立てば、このことは正しいし、有効な方法であるということができよう。

しかし、この文字の場合、当用漢字ではないから正しく読めなくてもやむを得ないとしても、漢字の残る一〇％が、象形文字・指示文字・会意文字であること、さらに読みに関しては、呉音・漢音・唐音に加えて慣用音が用いられており、必ずしも統一された読み方ではないことを考えるとき、ひとり形声文字の字音法のみで、一八五〇字の当用漢字に対決することは、はなはだしく多くの誤読を生んでゆくことになるであろう。指導の場にあつては、形声文字の読み方を中心にすえながらも、その例外の読みを系統づけ、整理して、指導に当たることが

重要であろう。例外の収集と整理こそが先決問題であるかもしれない。

これらの問題点を整理すると、

F 新出文字の習得は、一回の指示学習でできるものではなく、くりかえしの必要があること。一度習得しても、忘却することも多い。

G 漢字の読みに関する系統づけ（整理）を通して、読み（構造も含めうると思われる）の法則性をみいだすとともに、その例外の収集・整理をして指導に役立てる必要がある。

といった課題をとらえることができる。

#### 五、おわりに

資料が、当用漢字以外の漢字であったこと、誤読の理由は調査したが、正読の理由（原因）の調査がなされなかつたことなどによって、論拠の確かな考察をすることができなかつたのは残念である。しかし、学習者としての生徒が、いかに多種多様の読み方をするかということを見ることのできたし、A、Gのような問題点が含まれていることもとらえることができた。これらを手がかりとして、具体的に一八五〇字（現在一九〇〇字の試案も出されているが）の分析と整理を通して、新たな漢字学

習の指導法をさぐっていきたいものと思う。読者諸賢のご指導、ご助言をいただければ幸いと思う。

（茨城大学附属中学校教諭）